

藤田岩根さん（日本のお手玉の会前会長）

お手玉で新居浜を元気に

こんにちは。本日の活動テーマ「ぬくもりを届けたい、手から心へ」。

平成3年9月20日“日本のお手玉の会”を立ち上げるときに掲げたテーマです。

日本全国へ、そして世界へ、と小さな田舎の片隅から発信。活動を進めていく中でたくさんのお出会いと感動そして善意の協力、支援をいただきました。

元来お手玉遊びは、趣味と申しましょうか、娯楽ではありますが、体を俊敏に動かすスポーツ性があります。また指一本一本使って自由な発想、創作をしながらくり出す芸術性豊か。そのうえ、健康増進、脳の活性化。今や福祉・介護やコミュニケーションの場に受け入れられています。

『たかがお手玉。されどお手玉』



なぜ、新居浜からお手玉遊びなの

ほんとうに何故新居浜なのか……。新居浜西高出身の皆さんも疑問に思われたことでしょう。

近代工業都市として発展した新居浜市も1980年頃から産業構造不況に見舞われ、街ゆく人もなんとなく活気を失っています。

「市民の手で何とか街を活性化させたい」

当時は構造不況に加え、核家族化、少子化の進行により、一人暮らしのお年寄りが増加、人は心の温もりや安らぎ、心の交流を求めておりました。

伝承遊びを教える活動の中で、思わぬ発見です。

公民館等イベントの中でお年寄りには懐かしい遊び、子どもたちにとっては、とてもとても新鮮な遊びに映ったのでしょう。

知らない内に人の輪ができ、いい笑顔とよるこびの声。

「お手玉でまちおこし！！」を。胸が熱くなるのを覚えたのです。

知らない人たちが仲良く歌ったり、教えたり、世代を超えて元気になっていく姿。運動機能の向上、老化防止等。

皆さんもお手玉遊びは女の子の遊びだと思われていると思いますが、多くの可能性を秘めたお手玉を新居浜の新しい文化に。胸踊らせて内なるエネルギーが自分を元気にしてくれたものです。

新居浜といえば、男性的な太鼓台のイメージが強くありますが、県内外の人たちに「魅力的なまちは？」と尋ねてみると女性らしい文化が感じられる優しいまち、との声も一

一。

やがてお手玉遊びの普及活動を通し、新居浜のまちおこしを進めるようになりました。企業の研修会や学校教育の中へ。小学校3年生の授業、体験学習「昔の遊びを体験してみよう」作り方、遊び方、そして学校では教わらない歴史やお手玉歌、道徳心。先人たちの生活の中から産みだされた知恵と工夫が語り継がれ、遊び継がれ、歌い継がれたことを学習してもらいました。

全国へ発信、そして世界へ

「たかがお手玉」というなかれ。三千年の歴史を持つ世界共通の遊びだと分かり、国際交流を考えるようになりました。

国によって道具は異なるけれど、石、貝殻、木の実、大理石等、現在も世界 100 ヶ所余りの国で遊ばれています。

活動が盛んになると、国内各地に支部が誕生、そして海外にも。こうしてお手玉は日本の伝統文化として海外でも紹介されることになりました。

国境を越えて、言葉も肌の色も越えて。

ハプニング続きの海外遠征、訪問すること 18 ヶ国。

エピソード

◇ エピソード①

長い歴史の中で、子どもたちがその時代時代を鋭い感性で唄ったものには、戦争にちなんだ歌詞があります。

公民館でのこと。お手玉唄としてお年寄りが歌った中には（日露戦争）などですが、館長さん顔色を変えて飛んできましたよ。「その歌詞はまずい。ダメ！！」と。しかし現場で遊んでいる方々には笑顔ランラン。

ハワイでの失敗もありました。

「インディアンのうた」インディアンは差別用語だからです。

◇ エピソード②

1999年サンディエゴでのことです。異文化が集う民族祭でのことです。

私たちが日本から持参したお手玉。四枚の布を組み合わせて作った日本調のお手玉です。日本ブースで買うと1個1ドルします。

お手玉遊びに参加したら、そのお手玉が貰えるだろうか！と子どもたちはひそかに期待しています。

その中に白人と黒人の坊やが居ました。大方の子どもたちが退いた後も何人か一生懸命している姿を見てお手玉をあげたくなり、幾人かに渡し、5～6才の白人の坊やに渡したところで、お手玉がなくなりました。別の場所に置いてあったお手玉を取りに行き、大急ぎで戻り、次の黒人の坊やに渡そうとしたのですが受け取りません。一瞬戸惑った私ですが、ドキッ、気付きました。同じ靴下、同じシャツ。二人は兄弟だったのです。これは大変なことになった。早くなんとかしなくちゃ——。兄弟の後をずっと追ひ、40～50分も経ったでしょうか。テンポの良い音楽が流れてきた時、坊やの顔向きもいい様なので「大丈夫かな」と——お手玉2個をポンポンと投げました。

そうしましたら、なんと なんと上手な玉さばき。私の方を見てニコリ真っ白い歯をみせて笑っている。

その子はきっといつも白人の弟だけ優遇されている、と感じていたのでしょうか。その上今日は日本のおばさんからも差別された……。

でも、そうではなかった。と分かってもらえたらしく、喜びを態度で示してくれました。その様子を後方の陰から眺めていた兄弟の両親（お父さんは白人、お母さんが黒人）が私に駆け寄って来て、お母さんが私をギュッと抱きしめて、「サンキュウ、サンキュウ」と言ってくれました。

彼の嬉しそうな姿を目の前にして「お手玉の力はスゴイ！」と。

お手玉との出会いと感動を噛みしめた一日でした。

◇ エピソード③

もう一つ海外のハイスクールでの体験です。

日本語学習のクラスのある高校からお手玉の授業の希望あり、ひとクラスだけお引き受けしました。なんでも騒々しいクラスだと聞いていましたが、日本から持参した童謡のテープを流しますと、だんだんと穏やかな表情になり、リズムに合わせいい笑顔で技に挑戦するようになりました。

隣の教室で授業をしていたフランス語の先生は「いったい何の授業をしているのかな？」と見に来られて、「私のクラス10分でも良いからお願いします」ということになり、結局6クラスにお手玉の授業（振り技、寄せ玉遊び）の基本、コミュニケーション遊びのほか、お手玉パフォーマンス等を行いました。

帰国した後、生徒さんたちから手紙が届きました。

「私にハキサキ（お手玉のこと）を教えてくれてありがとう」

たくさんお便りをいただいたなかで、ある少年から次のような手紙がありました。

「僕の友人ジェイソンはユダヤ系アメリカ人です。あと3ヶ月の命です。ジェイソンは『お手玉が楽しかった』といつも言っています。ありがとう」

ジェイソンは全くちがった角度から（迫害のない、病を忘れさせてくれるもの）お手玉

を感じていたのですね。

後日ジェイソン君は亡くなったことが分かりました。

今は冥福を祈るのみでした。

新居浜西高校の生徒さんにもそのお話をしましたら、素晴らしい感性で受け止めてくれました。

西高の体験学習では、男子にもお手玉遊びを取り入れています。男子学生の要望もあって西高の卒業記念品はお手玉なのです。新居浜では結婚式の引き出物にもなっています。

時代と国境を越えたお手玉。

世界の人々が知りたがっている日本文化。

豊かな内容を持ち、布から組み合わせられ手作りのお手玉は多くの人々に大きな影響を与えていることが見えてきた思いです。

